

角野栄子『サラダでげんき』の世界  
—小学校教材と幼年童話—

A Study on the Fairy Tale “Sarada de Genki” by Eiko Kadono

山 田 吉 郎

Yoshiro YAMADA

# 角野栄子『サラダでげんき』の世界

## —小学校教材と幼年童話—

A Study on the Fairy Tale “Sarada de Genki” by Eiko Kadono

山田 吉郎\*

Yoshiro YAMADA

### 序

小学校の国語教科書には童話が収録されている。新美南吉の『ごんぎつね』が最も代表的なものであろう。『ごんぎつね』の場合、複雑な心理も描かれ、小学校4年生あたりの児童を対象としている教科書が目につくが、それに対して小学校に入学したばかりの1年生を対象とした童話にはどのような特色が見られるのであろうか。1年生を対象とする場合、童話といってもいわゆる幼年童話が想定されよう。もっとも、幼年童話の定義自体揺れている面があり、それについては後述するが、いずれにしても小学校1年生を対象とする時、一般の童話とはある程度個別化された作品が提供されるであろうと想定される。そして、それはまた、幼稚園教育において扱われた幼年童話とはおそらく連繋する面があり、そうした幼児教育との関係から光をあててゆく必要もあろう。

以上のように、小学校低学年（とくに1年生）向けの童話にはある程度固有の童話の構造があり、それはまた幼稚園・保育所等で扱う幼年向け童話と連続する特質を有しているかと想像される。本稿においては、その特質を具体的な作品に即して分析してゆくことをねらいとしている。

### 1. 『サラダでげんき』と幼年童話

本稿では、考察の対象として、『魔女の宅急便』の作者として著名な角野栄子の童話『サラダでげんき』を取り上げる。この作品は、小学1年生の国語教科書『新編 あたらしいこくご一下』（東京書籍、平成16年2月10日検定済）に収録されている。1年生向けということで、ほとんど平仮名が主体であり、したがって句読点だけでは平仮名が連続して意味が把握しにくいのを考慮して、所々にスペース（一文字分の空白）を配置した文章となっている。

まず、この作品をどう把握するかということであるが、一応幼年童話と捉えてよいように思われる。序にも述べたように、幼年童話という名称は必ずしも定着したものではないけれども、最近では相当に広く使用されている用語である。児童文学作家の安藤美紀夫は、その著『幼年期の子

どもと文学』（昭和56年5月、国土社）で、5歳児を中心に3歳から7歳くらいまでの子どもを受容対象としている。その場合、小学校1年生用教科書に載っている『サラダでげんき』は、幼年童話の範疇にはいるであろう。また、最近刊行された『アプローチ児童文学』（関口安義編、平成20年1月、翰林書房）の「幼年童話」の項で村川京子は、安藤の説をふまえながらも、もう少し広く幼児から小学校中学年くらいまでをその対象としている<sup>(注1)</sup>。私は本稿では一応村川の説に拠ることにしたい。明確な理由を論述できるわけではないが、一つ考えられるのは、教育学でいわれる9歳の節目（10歳の壁）が、幼年童話の受容対象を検討する上で目安になるのではなかろうか。子どもの知能が飛躍するといわれるこの時期を越えると、子どもなりに大人の見方に沿うような考え方ができるようになり、一面ではいわゆる幼児らしさが薄れてゆくようである。この9歳の節目（10歳の壁）より以前の子どもを直接の読者対象として書かれた作品を、一応「幼年童話」と呼べるのではないかと考えている。

この想定の一つの傍証として、たとえば宮沢賢治の名作童話『雪渡り』をあげることができる。この作品では狐の幻燈会の入場券をもらう資格があるのは、11歳以下（当時はかぞえ年、満年齢10歳以下）の子どもたちだけだと記されている。これはちょうど先述の9歳の節目（10歳の壁）に符合しており、作者の宮沢賢治は、狐の幻燈会に参加できるのは、大人に近い考え方ができるようになる一歩手前の子どもたちでないとはいえないと考えていたのであろうか。このように見てくると、『雪渡り』も幼年童話の範疇にはいるべきものとなるであろう。

幼年童話のもつ特徴については後に述べるが、これから考察してゆく『サラダでげんき』も、狐の幻燈会の入場券を手にするので年齢の子どもたちを直接の読者対象としているように考えられる。その入場券とは、おそらくは子どものもつ想像力の豊かさと、語られる内容をすんなりと受け入れる受容の柔軟性のメタファーでもあろう。そうした子どもたちの心に響き合う想像力豊かな世界を、『サラダでげんき』は構築していると思われるのである。

\* 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

## 2. 『サラダでげんき』の世界

『サラダでげんき』の主人公は、「りっちゃん」という女の子である。年齢は記されていないが、おのずと直接の読者対象である小学校1年生に近い年齢であろうと推測される。まず最初にこの作品の冒頭と末尾の一文を示そう。

(冒頭)

りっちゃんは、おかあさんが びょうきなので、なにか いい ことを して あげたいと おもいました。

(末尾)

りっちゃんの おかあさんは、サラダを たべて、たちまち げんきに なりました。

右の二つの文から明らかなように、りっちゃんのお母さんは病気になっていたのだが、最終的には元気を取り戻すという物語であり、いわゆる上昇的モチーフが明確に設定されている。幼年文学の場合、悲傷事を結末とする下降的モチーフは特別な場合を除き慎重に避けられており(先述の『ごんぎつね』の場合はやや高学年が対象ということもあり、ごんぎつねの死で終わっている)、基本的に前進的な物語の枠付けがなされていることが多い。それはまた、瀬田貞二がその著『幼い子の文学』(昭和55年1月、中公新書)でいう「行って帰る」構想とも符合するものであろう。『サラダでげんき』の場合、病気になったお母さんが再び元気になるという物語であり、基本的には一種の「行って帰る」構想のヴァリエーションにあてはまると思われる。そして、この物語のポイントは、お母さんが再び元気になるプロセスの中で、主人公のりっちゃんの内部にどのような変化あるいは成長が見られたかという点であろう。ここに、この物語の主題があろう。「行って帰る」幼年文学の構想というのは、主人公や主要登場人物が単に元の位置に戻ったというだけの意味ではもちろんなく、行く前と帰ってきた後の心身の変化が問題となってくるのである。決して同じ位置に戻ってくるのではないのである。

次に、『サラダでげんき』の物語のプロットに沿って、この作品の特質を分析してゆこう。

冒頭の一文につづいて、次のように語られてゆく。

「かたを たたいて あげようかな。なぞなぞごっこをして あげようかな。くすぐって、わらわせて あげようかな。でも、もっと もっと いい ことは ないかしら。おかあさんが、たちまち げんきに なって しまうような こと。」

りっちゃんは、いっしょうけんめい かんがえました。

「あっ、そうだわ。おいしい サラダを つくってあげよう。げんきに なる サラダを つくってあげよう。」

主人公のりっちゃんが、お母さんに何をしてあげるか、一生懸命に考えている様子が描かれているが、この短い叙述の中に幼年文学ならではの要素がいくつか内包されている。最初に思いついた肩たたきは通常思いつく事柄であろうが、そのあとにつづく「なぞなぞごっこ」や「くすぐって、わらわせ」することは、少し意表をつくであろう。これはい

ずれも遊びであり、しかもくすぐりは一種のいたずらであろう。この遊びは、「幼稚園教育要領」(平成20年3月28日 文部科学省告示第26号、平成21年4月1日施行)においても、第1章「総則」の「第1 幼稚園教育の基本」で「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」と記されており、幼児教育の基本とも言えるものである。おそらくは小学校1年生前後であろう主人公のりっちゃんが「なぞなぞごっこ」を思い浮かべたのも、この年齢の子どもの心理としては自然な流れであろう。また、お母さんを「くすぐって、わらわせてあげよう」と考えた一種のいたずらは、やはり子どもたちのとりわけ好むものである。子どもがいたずらを好む点については、新美南吉『ごんぎつね』のさまざまなエピソードの中で子どもたちがいたずらに強い関心を示したことを実証した北吉郎著『新美南吉「ごん狐」研究』(平成3年5月、教育出版センター)があり、それに依拠しつつ論述した拙稿「角野栄子の幼年童話の世界—幼児の受容の視点から—」(『鶴見大学紀要』第46号、平成21年3月)を参照されたい<sup>(注2)</sup>。ともかくも、『サラダでげんき』の読者である幼い子どもたちは、なぞなぞ遊びやくすぐりのいたずらに、心を刺激される楽しさを覚えることであろう。

そのようにりっちゃんの思いはめぐり、やがてりっちゃんは、お母さんが元気になる「おいしい サラダを つくってあげよう。」という気持ちを抱く。これも食べものを主要な題材として取り上げたわけで、幼い子どもの心をかきたてるものである。食べものへの関心と願望の成就を主題とした幼年童話・絵本は、角野栄子の「アッチ・コッチ・ソッチのちいさなおばけ」シリーズや中川李枝子の『グリとグラ』シリーズを見ても容易にうなずかれるところであろう。ただ、「サラダ」については、子どもたちが、カレーライスやスパゲッティ、あるいはチョコレートやアイスクリームなどと比して必ずしも「大好き」と言えるものとは多少異なるように思われる。サラダの種類によっては好きではないと答える子どもたちも一定の割合でいるように想像される。ここで、りっちゃんがサラダを思いついたとしたところは、おそらく作者角野の中で、健康のイメージと結びつく要素を発想したためであろう。先にあげた嗜好性の強い食べものでは、必ずしもお母さんの病気を治す健康的な要素と結びつかないのである。(ついでながら、サラダを取り上げた理由として子どもにサラダの重要性を教えるためといった教育的側面は、少なくとも直接には意図されなかったと思われる。)

こうしてお母さんのためにサラダを作ることを決めたりっちゃんは、具体的にサラダを作りはじめる。以下、物語は主人公のりっちゃんが「おいしいサラダ」を作りあげるまでの過程が描かれてゆく。そしてそこに、幼年文学独特の構想が組み込まれてゆくのである。

冷蔵庫からきゅうりやキャベツ、トマトを取り出して切り、大皿に乗せてゆく。まずはその野菜を切ってゆく様子がリズムカルな表現を使って描かれる。

きゅうりを トン トン トン、キャベツは シャ

シャ シャキ、トマトも ストン トン トンと き  
って、おおきな おさらに のせました。

「トン トン トン」は平常のオノマトペとしても「シャ  
シャ シャキ」「ストン トン トン」には工夫が見られ、  
言葉を遊ぶことを好む子どもの性質に適っている。こうし  
たオノマトペや歌謡的フレーズなどは、角野栄子の幼年童  
話にはほぼ省略されることなく導入されている。

さて、大皿に盛られた野菜を、どのようにして「おいし  
いサラダ」に仕上げるかが、この物語の読みどころである。  
調理の具体的方法としては、かつおぶしを入れ、ハムを加え、  
茹でたとうもろこしを入れ、さらに砂糖、にんじん、こん  
ぶを入れてゆくことになるが、そのそれぞれを加えるアド  
バイスを、いろいろな動物たちがあらわれてりっちゃんに  
告げるのである。この構想は、宮沢賢治の名作童話『セロ  
弾きのゴーシュ』に通底するものがあり、物語世界に豊か  
な空想の奥行きを与えている。賢治の『セロ弾きのゴーシュ』  
では、三毛猫、かつこう、狸の子、野ねずみの親子などの  
動物が出てきて、それぞれ大事な演奏会を控えたゴーシュ  
にセロを弾く上での貴重なアドバイスを与えてゆく。それ  
に対し、『サラダでげんき』に出てくる動物たちの場合は、  
アドバイスそのものはサラダの素材をりっちゃんに教える  
だけであるが、その動物たちの登場の仕方に意表を衝く想  
像力のひろがりがあり、読み手の子どもたちの心をつよく  
揺り動かすものがある。

最初のはらねこが家にはいつてきて、「サラダに かつお  
ぶしを 入れると いいですよ。」とアドバイスし、ついで  
となりの犬が「なんと いっても、ハムサラダがいちばん  
さ。」とハムを入れることを教え、窓にすずめが飛んできて、  
「チュツ、チュツ。とうもろこし 入れなきゃ げんきに  
なれない。」と告げ、さらに、りっちゃんの足もとからあり  
が声をかけ、「サラダには おさとうを ちよっぴり。」と  
教える。かつおぶしはねこの、ハムは犬の、とうもろこし  
はすずめの、さとうはありの好物であり、食べることの楽  
しさを語りながら、りっちゃんへのアドバイスがなされて  
ゆく。この動物たちそれぞれの好物を語る楽しさの引き出  
し方が巧みである。

こののちさらに動物たちがあらわれるが、やがて馬がや  
って来るあたりから、作品世界内部に空想が大胆に取り入  
れられてゆく。以下に引いてみよう。

こんどは、おまわりさんを のせた うまが やっ  
てきました。

「なんと いっても、サラダには にんじん。おかげで、  
かけっこは いつも 一とうしょう。」

「まあ、ありがとう。」

その とき、  
「でんぼうでえす。」

と、こえが して、でんぼうが とどきました。  
「サラダには うみの こんぶ 入れろ、かぜ ひか  
ぬ、いつもげんき。ほっきょくかい 白くまより。」

りっちゃんは、こえを 出して でんぼうを よむ  
と、こんぶを きって、サラダに入れました。

「さあ、これで、できあがり。」

おまわりさんを乗せた馬、北極海の白くまよりの電報な  
ど、りっちゃんの日常生活からは想像もできないような形  
で、動物たちからのアドバイスがなされる。おまわりさん  
を乗せた馬の姿は日本ではもちろん見られず外国の風景で  
あるし、さらに北極海の白くまという地球の果てからの便  
り（電報）が舞い込むのである。このあたり、想像力がみ  
るみるかきたてられてゆくようなおもむきがある。

ここまで動物たちがさまざまな食材の情報を提供して、  
ようやくサラダが出来上がったかのような印象を受ける。

が、作者の角野栄子は、ここで読み手の子どもたちの心  
を一気につかむエピソードを繰り出す。今までの動物たち  
による食材の提供に対し、いわば総仕上げとなる調理を、  
しかも出現した巨大な動物自らが買って出るのである。そ  
の一節を引こう。

とつぜん、キューン、ゴー ゴー、キューと いう  
音が して、ひこうきが とまると、アフリカぞうが  
せかせかと おりて きました。

「まにあって よかった よかった。ひとつ おてつだ  
いしましょう。」

「ありがとう。でも、もう できあがったの。」

りっちゃんは いいました。

「いや いや、これからが ぼくの しごと。」

アフリカぞうは、サラダに あぶらと しおと す  
を かけると、スプーンを はなで にぎって、力づ  
よく くりん くりんと まぜました。

アフリカぞうがはるばる飛行機に乗って、りっちゃんの  
作ったサラダに最後の仕上げをすべく訪れてきたのである。  
なんと大胆でまたユーモラスな親愛の情に充ちた発想であ  
ろう。この思い切り空想をはばたかせた叙述が生き生きと  
物語を読む子どもたちの心に息づくことであろう。とりわ  
け、スプーンを長い鼻で握って「くりん くりん」と混ぜ  
合わせる動作は、そのダイナミックな動きとリズムカルな  
擬態語の効果で、作品のクライマックスにふさわしい躍動  
感を生み出している。

こうしたストーリーの展開においては、アフリカ象が日  
本の小さな女の子の家に飛行機に乗ってやってくるはずが  
ない、と決めつける必要はむろんのことない。幼い子ども  
の心理として事象をまるごとその心に受け入れるであろう。  
この物語を読む子どもたちの心はむしろその縦横無尽な物  
語の想像力に刺激され、のびやかに活性化していると考え  
られる。ここに、幼い子ども向けの童話における空想力の  
重要性が示されている。

以上たどってきたプロットの展開を経て、主人公のりっ  
ちゃんの作るサラダはみごとに出来上がり、病気のお母さ  
んに提供されるのである。

「おかあさん、さあ、いっしょに サラダを いただき  
ましょ。」

と、りっちゃんは いいました。

りっちゃんの おかあさんは、サラダを たべて、  
たちまち げんきに なりました。



一生懸命作ったサラダを、主人公はお母さんといっしょに食べる。単にお母さんの許に届けるのではなく、いっしょに食べるところに、苦心して作ったサラダを囲んで時と場を共有し、食の楽しみに浸りつつ母との絆を確かめ合う主人公の充足感が表現されている。

### 3. 童話『サラダでげんき』の特質

以上、角野栄子の童話『サラダでげんき』の作品世界を分析してきたが、ここで今まで論及してきた幼年向け童話としての特色をまとめておこう。

まず、作品の主題および基本構想にかかわる視点より見れば、『サラダでげんき』は、いわゆる幼年童話としての特色がよくあらわれていると言えよう。すなわち、病気になったお母さんが再びよくなるというテーマは子どもにとって身近で普遍的なものであり、瀬田貞二の有名な幼年文学の理論の「行って帰る構想」（この物語の場合は、おかあさんが病気の状態からもとどおり元気になる構想）に合致していると考えられる。

また、作品内部の構成や表現を具体的に見てゆけば、次のような点に注目したい。

第一に、子どもが好むオノマトベが取り入れられ、たとえばずめのさえずりや野菜を切る音などはリズムカルで歌謡的な要素がある。この歌謡的フレーズを入れることは幼年童話にとってきわめて大切で、ことば遊びの好きな子どもたちを惹きつけるであろう。

第二に、子どもの好むいたずらの要素（おかあさんをくすぐろうとするとところにあらわれている）が取り入れられている。この要素は、『サラダでげんき』ではわりあい控え目に扱われているが、そのぶん主人公のりっちゃんの素直な性格が印象づけられている。

第三に、おまわりさんが馬に乗ってあらわれたり、アフリカ象がはるばる飛行機に乗ってあらわれたりと、空想力が豊かである。すでに述べたごとく、幼年期の文学の場合、この適度な空想性は欠かせない。

第四に、類似したエピソードの繰り返しが採用されている。動物たちが次々とりっちゃんの許にあらわれ、サラダの材料や調理についてアドバイスを与えてゆく。宮沢賢治童話『セロ弾きのゴーシュ』にも通底する動物たちの訪問譚の反復が基本構造をなしており、子どもの心にリズムを与え、物語が子どもたちの心に深く届くようになっている。

さらに第五に、子どもにとっての大きな関心事である「食べもの」を扱った「食べもの童話」である点に注目したい。角野栄子にはこの作品のほかにも食べものを題材とした「スパゲッティがたべたいよう」「カレーライスがこわいぞ」などの「食べもの童話」があり、さらに他の現代の童話作家や絵本作家にも食べものを扱った作品が多い。先にも触れたが、一例だけ有名なものをあげれば、中川李枝子・大村百合子の人気絵本『ぐりとぐら』シリーズの最初に出てくる「かすてら」が印象深い。なお、この「食べもの童話」は大正末から昭和初期に明治製菓のPR雑誌『スキート』（大正12年6月創刊、季刊）に数多く掲載された。が、その

後日本が戦争にはいつてゆくにつれて姿を消したものである。ちなみに、井原あやによる研究発表「川端康成『キヤラメル兄妹』試論—PR雑誌『スキート』と消費文化—」（川端文学研究会第147回例会発表資料、平成20年12月20日、昭和女子大学）の調査を参照して掲載作品を記せば、佐藤春夫『珍しいお菓子をたべた話』（昭和7年1月）、小川未明『童話 チョコレートノニホヒガシマス』（昭和7年5月）、松原至大『破裂したプディング』（昭和7年11月）、小川未明『狼とチョコレート』（昭和8年12月）、川端康成『キヤラメル兄妹』（同）などをはじめ数多くある。なお『スキート』は太平洋戦争中の昭和18年、誌名が『栄養之友』と変更され、やがて休刊に至った。ともかくも、食べ物という童話の主題は時代状況に大きく影響されるところが存したであろう。このように食べ物童話という系列は相当の歴史を有しており、角野栄子の『サラダでげんき』もその史的展開の中で考えてゆく必要があろう。

以上、『サラダでげんき』の童話世界の特質を分析してきた。次章では、この作品が小学校1年生用教科書でどのように扱われているかを考えてみたい。

### 4. 小学校教材としての『サラダでげんき』

先にも触れたように、角野栄子童話『サラダでげんき』は、東京書籍発行の『新編 あたらしいこくご一下』に掲載されている。同書の6頁から16頁まで掲載されているが、ほぼ頁ごとに挿絵が配置されており、挿絵を楽しみながら子どもたちは読んでゆける（絵・長新太）。むろん絵本とは異なるが、絵の占める役割が相当に大きく、そのぶんだけ絵から童話世界を規制する傾きもあろう。その意味で小学校教材とはいえ、幼児教育で用いられる絵本や童話と、受容形態の面で重なり合う部分があるであろう。小学校に入学してまもない子どもたちへの国語教材としては、やはり幼児教育との連続面が存在すると考えられる。

さて、具体的に当該教科書の本文掲載の後に載せられている課題を見てみよう。この教科書では、大きく三つの課題に分けられている。便宜上、番号を付して次に引く。

- (1) どんな 人や どうぶつが 出て きたかな  
おはなしに 出て きた どうぶつを、出て  
きた じゅんばんに さがしましょう。
- (2) 「おはなしカード」を かきましよう  
カードに すきな ところの えや ぶんを  
かきうつしましょう。
- (3) いろいろな おはなしを よみましょう

以下、それぞれについて論述する。

第1点の「どんな 人や どうぶつが 出て きたかな」という問いかけは、読み終わった童話世界の内容を正確に把握することをねらいとするものであろう。教科書では、この問いかけの頁に動物の絵が9枚描かれており、そこから7枚を選んで出てくる順に並べるように設定され、物語の時間軸に沿って生じた事象を正確に把握することを求めている。こうした課題は小学校低学年の国語指導では基本的なものであろう。「小学校学習指導要領」（平成10年12月14

日改訂、平成14年4月1日施行)の「第1節 国語」においては、「第1学年及び第2学年」の目標として、「(3) 書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付きながら読むことができるようにするとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。」と明記されており、「書かれている事柄の順序」の正確な把握が求められており、そのことに対応した課題である。また、絵を選ばせることで、同じく学習指導要領が求めるような子どもたちを楽しませる工夫もなされている。一方、幼児教育においてはどうか。「幼稚園教育要領」の第二章「ねらい及び内容」において、「言葉」の領域の「3内容の取扱い」では、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」と記されている。物語の内容把握や楽しみ味わうことに触れられているが、前出の「小学校学習指導要領」にあったような「書かれている事柄の順序」を正確に把握することについては少なくとも直接触れられてはいない。物語の時間軸に沿った事象の整理と把握は、物語受容の面において幼児教育と小学校教育とのつながりの中でその展開を図る一つのポイントとなるものであろう。

小学校1年生教科書における『サラダでげんき』読後の第2の課題は、『おはなしカード』を「かきましょ」である。具体的に「カードに すきな ところの えや ぶんをかきうつましょ。」と記され、一枚のカードの例が載せられている。「スプーンをはなでにぎって、力づくくりんくりんとまぜました。」の一節が転記され、スプーンを握るアフリカ象や乗ってきた飛行機の絵が描かれている。この場面は何気なく例として載せられてはいるが、先にも述べたようにこの作品の中で最も躍動的なクライマックスを形成する場面であり、子どもたちの心に打てば響くように課題を理解させる力を与えている。このように絵を用いて物語の内容を理解させることは、「小学校学習指導要領」と合致している。同指導要領では、「第1学年において2の内容(論者注一小学校国語の第1学年及び第2学年の学習内容)を指導するに当たっては、入門期であることを考慮し、当該学年にふさわしい指導を行うこと。」と記され、「絵に言葉を入れること、昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと、絵や写真などを見て想像を膨らませながら読むことなどを主として取り上げるよう配慮すること。」と指導方法が提示されているのである。このように見てくると、小学校1年生の段階においては、幼児教育とは一線を画しながらも、幼稚園・保育所等で行われている絵本・童話の読み聞かせや紙芝居などを取り入れることが要請されており、いわゆる言語表象と絵画表象との融合による学習効果が期待されているのである。

『サラダでげんき』読後の学習の第3の課題は、「いろいろな おはなしを よみましょう」であり、学習からの展開、発展が図られている。この頁には子どもたちの顔が描かれて、漫画のように吹き出しが設けられ、「がっきゅうぶんこには、どんな 本が あるのかな。」「うちに ある本を

もってきたいな。」と記されている。また、この教科書の『ふろく』にも、いろいろな おはなしが しょうかい されています。」と添え書きされて、子どもたちの興味を広げようとする工夫がなされている。さらに、その次頁には、「どのように よみますか。」と質問が投げかけられ、同じく吹き出しの中に「じぶんでよむわ。」「うちの 人に よんでもらう。」「せんせい、よんで ください。」などと子どもたちの声が記されている。子どもたちが自ら朗読、黙読するだけでなく、読み聞かせをも方法として提示している点で、前述の第2点の絵の利用と同じく幼児教育との接点をもたせる配慮がなされている。

以上、『サラダでげんき』をめぐる小学校教科書の取り扱い方を見てきた。第1学年の教材ということもあり、今まで述べてきたように、その指導方法には幼児教育との接点を重視する姿勢が確認できる。すなわち、変遷する現代の社会状況を視野におさめた上で、幼児教育と小学校教育との間の連続性をあらためて検証し、その分析の中で学習の展開、発展のあり方を不断に問い直すことが求められているのであろう。

## 結

本稿では、角野栄子の童話『サラダでげんき』の作品世界の分析を通して、その幼年童話としての特質を明らかにするとともに、この作品が小学校1年生用の国語教科書に収載されていることに注目し、その教材としての特色についても考察を加えた。

『サラダでげんき』は短い作品ではありながら、その主題や構想、表現に、幼年文学特有のさまざまな要素が見てとれることを論じた。主人公の苦心して作ったサラダで母の病が癒えるという上昇的テーマ設定がなされ、オノマトペ、適度な空想性、類似したエピソードの反復、食べもの童話などの幼年文学の基本的な要素が豊かに盛り込まれた作品となっている。角野栄子の幼年童話には、「アッチ・コッチ・ソッチのちいさなおばけ」シリーズをはじめこうした基本要素をしっかりとふまえたものが数多くあり、そうした厚みの上に成立している作品である。

また、『サラダでげんき』は小学校1年生用教科書に収載されており、教材としてどのような特色をもっているのか、さらに当該教科書においてどのような学習指導が提示されているのかを考察した。小学校1年生においては、たとえば絵を導入した学習指導など幼児教育で行われている指導が取り込まれており、幼児教育から小学校教育へとつながる展開を想定することができた。それはまた、教材としてのこの作品の豊かな可能性を示すものでもあった。『サラダでげんき』を論ずるに際しては、その文学の特質を探究することと、幼児教育・小学校教育の教材としての可能性を併せて考えてゆくことは、深く連繫するものであらうと思われる。今後は他の作家の作品と比較しつつ検討を重ねてゆきたいと考えている。

角野栄子は『魔女の宅急便』の作者として知られ、文字通り現代を代表する童話作家だが、この作家の幼年文学の

領域には測り知れない豊かさがある。今後、さらに作品考察の対象を広げ、この作家が幼年童話の世界に降ろした錘りの深さに迫れればと考えている。

#### 注

- (1) 村川京子「幼年童話」(『アプローチ児童文学』、関口安義編、平成20年1月、翰林書房)36頁-41頁。
- (2) 北吉郎著『新美南吉「ごん狐」研究』(平成3年5月、教育出版センター)148頁-156頁参照。